サンプ寺の帰属問題

――サンプ寺はカダム派所属の寺院であるのか――

西沢　史仁

序：

サンプ寺（gSang phu dgon pa, i. e., gSang phu ne'u thog）は、第一ラプチュンの水丑の年（chu glang lo, 1073年[1]）に、アティシャ（Atiśa, 982-1054）の三大弟子の一人であるゴク・レクペーシェーラプ（rNgog legs pa'i shes rab, 十一世紀）により建立された大学問寺であり、教法後伝期における仏教教学の復興と発展に大きな貢献を果たした。このサンプ寺は、これまで内外の学者達により、カダム派所属の寺院と見なされてきており[2]、実際、サンプ寺で活躍したゴク翻訳官（rNgog blo ldan shes rab, 1059-1109）やチャパ・チューキセンゲ（Phya pa chos kyi seng ge, 1109-1169）を初め、サンプ寺所属の多くの学者達の著作は、近年出版された『カダム全集』に収録されていることは夙に知られた事実である。しかるに、実はサンプ寺をカダム派に帰属させることは、決して確固たる根拠が

1　サンプ寺の建立年については、三つの異説が知られているが、それについては、Kuijp 1987, p. 106参照。より詳しくは、西沢2011, p. 119f. を参照されたい。

2　例えば、山口1982, p. 72；Kuijp 1987, p. 103；Everding 2009, p. 143など参照。唯一の例外は、羽田野伯猷である。羽田野は、サンプ寺を、「カーダム派と密接な関係を持ちつつも、カーダム派所属の寺院とはなっていないのである」（羽田野1965, p. 286）と評価している。これは卓見であり、後述するように、筆者もまた同様の評価を有している。但し、羽田野がその根拠として挙げた理由は、サンプ寺が「律系の寺院」であるという点であるが、それはサンプ寺がカダム派に帰属しない理由としては些か薄弱ではないかと思われる。「律系の寺院」であってもカダム派の寺院であることと決して矛盾せず、またそもそも、「律系の寺院」とは非常に曖昧な表現である。なぜならば、戒律の研究は宗派の枠組みを越えた仏教徒の一般的課題であり、それは特定の宗派とは無関係であるから。本稿では筆者はそれとは別の側面からサンプ寺の帰属問題を検討した。

あってのことではない。サンプ寺がカダム派に帰属するか否かという問題は、サンプ教学がカダム教学に属し、その一翼を担うものであるのか否かという教学上の帰属関係にも不可離に関わっており、チベット仏教教学史において、決して看過し得ない重要な問題の一つである。そこで、本稿においては、サンプ寺はカダム寺所属の寺院であるという従来の一般的解釈に批判的な考察を加えることを通じて、改めてサンプ寺の帰属問題を再検討したい。

1. カダム派について：

サンプ寺がカダム派に所属するのか否かという点を考察するためには、先ず最初に、カダム派とは如何なる宗派であるのかという点について一定の理解を得ておく必要がある。カダム派という宗派は、他の宗派に比べて、宗派的枠組みが比較的曖昧な、あるいは、緩い集団であり、これを如何に定義するのかという点は決して容易な作業ではない。実際、カダム派の開祖として誰を立てるかという最も根本的な問題ですら、厳密に検討するならば、議論の余地が大いに残されているのである。そこで我々はまず最初にカダム派の定義について検討することから始めよう。依用する資料は、最も詳細かつ信頼性が高いカダム派史と評価されているレチェン・クンガギェルツェンの『カダム明灯史』(1494年著作）を主として、適宜に『青冊』等の他の史書をも依用することにする。

まず最初に、カダム派（bKa' gdams pa）の「カダム（bka' gdams)」という語の意味についてであるが、『カダム明灯史』では、冒頭部分で、この語をこう規定している。『カダム明灯史』p. 3.3f.[3]：

> 「三蔵の真髄である三士の道次第（skyes bu gsum gyi lam gyi rim pa）に対して、「カダム」と云う。なぜならば、［この三士の道次第は、］大小の乗の教説全てのうち、捨てるべきものは微塵もなく、一人の人が成仏する条件として、教主により教誡されたもののうち最上のものとされているからである。」

---

3 *bKa' gdams gsal sgron*, p. 3.3f.: sde snod gsum gyi snying po skyes bu gsum gyi lam gyi rim pa la ni bka' gdams zhes bya ste/ theg pa che chung gi gsung rab ma lus pa las bor rgyu rdul tsam yang med par gang zag gcig 'tshang rgya ba'i cha rkyen du ston pas gdams pa'i mchog tu byed pa'i phyir ro//

ここで、「カダム」という語は、三士の道次第に結び付けられている。[4] この三士の道次第を主題とした〈道次第（lam rim）〉という文献群は、カダム派の諸論師により多数著作され、後代のゲルク派においても、その伝統が受け継がれたことは夙に知られた事実であるが、この語釈は、〈道次第〉という文献群がカダム派の伝統から生じたものであることを如実に示している。[5] この「カダム（bka' gdams）」という語は、後続の文章に於いて、四つの語釈が加えられているが、その解説は既に別の箇所で行ったので、ここでは省略する。[6]

次に、カダム派の開宗と展開の模様については、『カダム明灯史』に以下のように簡潔に纏められている。『カダム明灯史』p. 36. 3-5：[7]

「そこで、ジョオ（＝アティシャ）御自身の時代に、このカダムの〔教〕宝が始まり（dbu brnyes）、ゲシェ・トゥンパ（＝ドムトゥンパ）が流儀を立て（srol gtod）、〈御三兄弟〉の時分に、広まり興隆したものである。」

ここで、〈御三兄弟（sKu mched gsum）〉とは、ドムトゥン・ギェルウェジュン

4　三士とは、小士（skyes bu chung ngu）、中士（skyes bu 'bring）、大士（skyes bu chen po）の三種の人を指す。小士とは、五道輪廻のうち天位と人位の生存を受けることを追求する者を指す。これに対して、中士とは、輪廻を厭離して、自分自身のためだけに解脱を追求する人、大士とは、大悲心に依拠して、一切衆生の為に一切相知を追求する人を指す。ツォンカパの『菩提道次第大論』もまた、この三士の道次第を主題とした著作である。

5　この〈道次第（lam rim）〉と密接に関係したものとして、<教次第（bstan rim）>と呼ばれるものがある。この両者の関係については、レチェン・クンガギェルツェンが異説を含め簡単に解説している。『カダム明灯史』pp. 5.17-6.4参照。

6　西沢2011, pp. 95-97参照。他にも、この四つの語釈は、井内／吉水2011, p. 19f.に紹介されている。

7　*bKa' gdams gsal sgron*, p. 36.3-5： de la Jo bo nyid kyi dus su bka' gdams rin po che 'di'i dbu brnyes/ dge bshes sTon pas srol btod/ sKu mched gsum gyi ring la dar zhing rgyas par mdzad pa yin te/...

同様の規定は、『トゥカン教義書』にも見出される。*Thu'u bkwan grub mtha'*, p. 82.11-14： bka' gdams kyi lugs srol khyad par can de ji ltar byung ba'i tshul ni/ Jo bo rje dpal ldan A ti sha nas dbu brnyes/ sTon pa rin po ches srol phyes/ sKu mched gsum gyis dar zhing rgyas par mdzad/ Glang Shar gnyis dang Bya yul ba sogs kyis de las kyang rgyas par mdzad pa'o//. この箇所は井内／吉水2011, p. 41に訳出されている。

ネー（'Brom ston rgyal ba'i 'byung gnas, 1004/5-1064）の三人の筆頭弟子、即ち、ポトワ・リンチェンセル（Po to ba rin chen gsal, 1027-1105）、チェンガ・ツルティムバル（sPyan snga tshul khrims 'bar, 1038-1103）、プチュンワ・ションヌギェルツェン（Phu chung ba gzhon nu rgyal mtshan, 1031-1106）の三人を指す。この三者のうち、特に、ポトワの流派を、〈カダム・シュン派（bKa' gdams gzhung pa)〉、チェンガパの流派を〈カダム・ダムガク派（bKa' gdams gdams ngag pa)〉と称する。この解説によれば、カダム派とは、アティシャに端を発し、その筆頭弟子であるドムトゥンにより流儀が立てられ、ドムトゥンの三大弟子の時分に、シュン派とダムガク派に分かれて、より一層の興隆を現した宗派である。ここで、「流儀を立てる」と訳した srol gtod pa という語は、語義的には、srol 'byed pa（lit. 流儀を分けること、一派を開くこと）と同義であるが[8]、これをもってカダム派の開宗とするならば、カダム派の開祖は、ドムトゥンに他ならない。実際、チベットにおいては、伝統的に、ドムトゥンがカダム派の開祖とみなされており、現代の研究者の間でも、カダム派の開祖としてドムトゥンを立てることが一般的である[9]。しかるに、その場合に問題となるのは、カダム派の端緒を開いたアティシャをカダム派の開宗において如何に位置付けるのかと云う点である。さらに問題なのは、カダム派の開祖としてドムトゥンを立てた場合、アティシャの他の弟子達、特に、ドムトゥンと共にアティシャの三人の筆頭弟子と見なされるゴク・レクペーシェーラプとクトゥン・ツゥンドゥユンドゥン（Khu ston brtson 'grus g-yung drung, 1011-1075）――この三者は、「ク・ゴク・ドムの三者」（Khu rNgog' Brom gsum）と略称される――及びその弟子筋をカダム派に属すると見做してよいのかということも問題として浮上してくる。ゴク・レクペーシェーラプとクトゥン・ツゥンドゥユンドゥンがドムトゥンの弟子であり、その学系を引くものであるという明確な事実があるのであれば問題はない。しかるに、もしゴクとクトゥンがドムトゥンの弟子とは見做し得ず、ドゥムトゥンから地位的にも教学的にも一定の独立性を保っていたのであれば、彼等を一律ドムトゥンを開祖とするカダム派へ帰属させることは困難であろう。

8 『蔵漢大辞典』p. 2992参照。

9 例えば、山口1982, p. 68；井内／吉水2011, pp. 2, 23参照。これに対して、羽田野伯猷は、カダム派の開祖として、アティシャを立てている。羽田野1954b, p. 46；1955, p. 205参照。

またそもそも、ドムトゥンにカダム派という一宗派を起こそうという明確な意図があったのかも不明であり、もしドムトゥンにカダム派開宗の意図が認められないのであれば、アティシャをカダム派の開祖として立てた場合に如何なる不都合があるのかという点もまた考察すべき点である。以上の諸点がカダム派の開祖を巡る問題の所在である。この諸点を念頭において、諸々の史書において、カダム派が如何に規定されているか見ておこう。

まずプトゥンは、彼の仏教史（1322年著作）において、アティシャが特にドムトゥンに〈カダムの法流（chos lugs）〉を与えたことがカダム派成立の機縁となったことを述べている。[10]『赤冊』（1363年著作）では、「カダム派の相承（bka' gdams pa'i brgyud pa）」として、アティシャを最初に挙げている。そして、アティシャには、ク・ゴク・ドムという三大弟子がいるうち、特に、ドムトゥンを「カダムの祖父（bka' gdams kyi mes po）」と称している。[11]他方、『赤冊』より少し後に著された『ヤルルン・ジョオ仏教史』（1376年著作）では、一方において、カダム派を、「ジョオ・チェンポ（＝アティシャ）の遺法を保持する者達（Jo bo chen po'i rnam thar 'dzin pa rnams）」と規定しておきつつ、他方において、ドムトゥンを、『赤冊』同様に、「カダムの祖父」と称している。[12]このように、カダム派の相承の始まりとしては、アティシャを立てるが、アティシャに多数の弟子がいる中で、特に、ドムトゥンに特別の位置づけが与えられている点で共通していることが分かる。しかるに、これらの史書でも、カダム派の開祖はアティシャであ

10 『プトゥン仏教史』p. 201.20ff.: Jo bo rje rim gyis dBus su byon te slob ma Khu rNgog 'Brom gsum la gdams pa dang chos mang po gnang ste/ khyad par 'Brom la bka' gdams kyi chos lugs gnang ste dar bar mdzad do//「ジョオは順次にウーに赴き、弟子のク・ゴク・ドムの三者に教誡と法を多数お与えになり、特に、ドムには、〈カダムの法流〉をお与えになり、［カダムの法流（＝カダム派）は、］興隆するようになった。」　ここで chos lugs という語は、通常、「宗派」を意味する語である。

11 『赤冊』p. 61参照。同様の記述を残すものとして、『漢蔵文書集成』pp. 343-345参照。

12 『ヤルルン・ジョオ仏教史』p. 89.17f.: de la'ang Jo bo chen po'i rnam thar 'dzin pa rnams la bKa' gdams par grags pa la/...；ibid. p. 95.14-16：... sras kyi thu bo Khu rNgog 'Brom gsum/ de'i nang nas bKa' gdams kyi mes po 'Brom ston pa rgyal ba'i 'byung gnas des/ ...

るのかドムトゥンであるのか明確な形では示されていない。このことは、カダム派の開祖を巡っては、チベット人学者達の間にも解釈の揺れがあったことを示唆している。この点に関連して、『青冊』（1476年著作）に非常に興味深い記述があるので、引いておこう。『青冊』p. 395. 6-9[13]：

「叔父と甥（＝ゴク・レクペーシェーラプとロデンシェーラプ）の二人は、［その］直弟子に至るまで、〈ジョオの学説を保持する者（Jo bo'i gzhung lugs 'dzin pa）〉である。ゴク・レクシェー（＝レクペーシェーラプ）は、ドム［トゥン］の弟子でも（yang）あるので、〈カダム派〉にも（yang）所属する。」

ここで注目すべきは、まず第一に、ゴク・レクペーシェーラプはドムトゥンの弟子であるので、カダム派に所属すると明記されている点である。ゴク・レクペーシェーラプが本当にドムトゥンの弟子と見做しえるのかという点は慎重な検討が必要であるが、少なくても、『青冊』の著者は、レクペーシェーラプがドムトゥンの弟子であるという理由により、カダム派に属すると見做している点には留意する必要がある。このことは、とりもなおさず、ドムトゥンの弟子であるか否かがカダム派に帰属するか否かの指標となっていること、端的には、ドムトゥンがカダム派の開祖と見做されていることを示唆している。

第二に注目すべき点は、ここで明確に、〈ジョオの学説を保持する者〉と〈カダム派〉が区別されている点である。ゴク・レクシェーシェーラプは、〈ジョオの学説を保持する者〉であると同時に、ドムトゥンの弟子でもあるので、カダム派に属するとされた。しかし、注意すべきは、後者の文章にはゴク翻訳官ロデンシェーラプは外されている点である。つまり、ゴク翻訳官は、〈ジョオの学説を保持する者〉ではあるが[14]、叔父のように、カダム派に属するとは記されて

13 *Deb sngon*, p. 395.6-9：khu dbon gnyis dngos kyi slob ma dang bcas pa'i bar du Jo bo'i gzhung lugs 'dzin pa yin/ rNgog legs she 'Brom gyi slob ma yang yin pas bka' gdams par yang gtogs so//

14 ゴク翻訳官（1059-1109）はアティシャ（982-1054）の歿後に生まれた人物であるので、直接的にアティシャに師事したことはないが、アティシャの学説を保持する者であることは、例えば、彼がアティシャの『入二諦論』（*Satyadvayāvatāra*）や『中観口訣』（*Madhyamakopadeśa*）に対して註釈を現していることや、さらには、道次第の著作があることから伺える。ゴク翻訳官がアティシャの教説の教誡を誰から授かったは定かでないが、恐らくは、主に叔父のレクペーシェーラプから受けたものと推察される。

いない。その理由は、ゴク翻訳官がドムトゥンの弟子ではないからに他ならない。このことは、『青冊』の著者によれば、ゴク翻訳官及びその弟子筋の者達、端的には、サンプ系の学者達は、カダム派とは見做されていないことを示唆している。〈ジョオの学説を保持する者〉とは、アティシャの弟子筋に他ならないが、グー翻訳官は、それを、ドムトゥンの弟子筋を指す〈カダム派〉から峻別しているのである。即ち、

- 〈ジョオの学説を保持する者〉＝アティシャの弟子筋
- 〈カダム派〉＝ドムトゥンの弟子筋

アティシャの弟子は、必ずしもドムトゥンの弟子であるとは限らない。但し、恐らく、ドムトゥンの弟子であれば、アティシャの弟子ないし弟子筋である必要があるので、〈ジョオの学説を保持する者〉と〈カダム派〉は遍充に大小の違いが見られる。端的には、前者は後者よりも外延が広く、後者を遍充している。

ゴク翻訳官及びその直弟子達が、アティシャの学系を受け継ぐ者であることは、『学者の宴』にも明記されている。即ち、『学者の宴』p. 728.5f.[15]：

「［ゴク翻訳官は］道次第を著作なさり、トルンパもまた『教次第大論』を著作なさったので、［ゴク翻訳官の］直弟子以上（yan）は〈ジョオの流儀を行うもの（Jo bo'i lugs mdzad pa, ジョオの流儀に随順するもの）〉である。」

ここで注目すべきは、ゴク翻訳官及びその直弟子達は、道次第の著作を行ったという理由によりアティシャの学系を受け継ぐ者であることが明記されている点である。つまり道次第の相承の有無がアティシャの学系を保持する者のメルクマールとなっているのである。さらに、文中の「直弟子以上（yan）」という語は、ゴク翻訳官の直弟子までは、アティシャの随順者であるが、孫弟子以下の者達は必ずしもそうではないことを暗に示唆している。このことは、ゴクの直弟子以降のサンプ系の学者達においては、ドムトゥンの学統はいうまでもなく、アティシャの学統でさえ、他のカダム派の諸寺院におけるようには伝承されなかったことを含意している。実際、それを裏付けるように、『カダム明灯史』では、ゴク・レクペーシェーラブとゴク翻訳官の事績は比較的詳しく解説されているのに対して、ゴク翻訳官の四大弟子やチャパ等については非常に簡略な記

15　*mKhas pa'i dga' ston*, p. 728.5f.: ... lam rim yang mdzad cing/ Gro lung pas kyang bsTam rim chen mo mdzad de dngos slob yan Jo bo'i lugs mdzad do//

述しかなく、チャパ以降のサンプ系の諸学者に対しては、言及自体がなされていない。例えば、『赤冊』、『青冊』、『学者の宴』、『サンプ明鏡史』等では、サンプ寺の分裂や、その後の展開、例えば、〈ニェルシクの九子(gNyal/mNyal/dMyal zhig gi bu dgu)〉らによるサンプ系の講学院創設運動等々に対する解説が多かれ少なかれ見出されるが、この『カダム明灯史』においては、全く黙殺されている。このことは、『カダム明灯史』の著者にとっては、サンプ寺の学僧のうち、カダム派との関連で言及すべきは、せいぜい、ゴク翻訳官の直弟子達までであり、それ以降のサンプ系の諸学者は、カダム派とは基本的に無関係なものと見做されていたことを示唆している。もしこの想定が妥当であれば、これまでの常識的理解とは裏腹に、サンプ系の大部分の学者達は実はカダム派とは見做し得ないことになる。サンプ系学者がカダム派に所属する否かという点は極めて重大な問題であり、慎重な検討を要するものである。それ故、我々は結論を急がずに、その点を検証する為に、次に、我々の考察の眼をカダム派とサンプ系の学者達の関係に向けよう。

2. カダム派とサンプ系学者の関係：

まず最初にカダム派の分派について、『カダム明灯史』を資料として整理しておく。『カダム明灯史』においては、カダム派は、先に簡単に触れたように、カダム派の開祖とされるドムトゥンの三大弟子のうち、チェンガパの学系を継承した〈カダム・ダムガク派（bKa' gdams gdams ngag pa)〉と、ポトワの学系を継承した〈カダム・シュン派（bKa' gdams gzhung pa)〉の二つに大別される。[16] あるいは、これに〈カダム・メンガク派（bKa' gdams man ngag pa)〉を加えて三つを立てることがある。サンプ系の学者達をカダム・メンガク派として立てる解釈も見られるが、[17] 実際には、このカダム・メンガク派とは、カダム・ダム

16 このカダム・ダムガク派とカダム・シュン派の呼称は、『カダム明灯史』以前の一連の史書に既に見出されるので、この分類は、決してレチェン•クンガギェルツェンの独自の設定ではなく、当時広く認められていたものである。『赤冊』pp. 61-65；『ヤルルン・ジョオ仏教史』p. 118；『漢蔵文書集成』pp. 347，349など参照。

17 この解釈を挙げるのは、羽田野伯猷である。羽田野1965，pp. 280，286参照。そこで、羽田野は、ゴクの系統を、メンガク派と称する他にも、シュンルク派（gZhung lugs pa）と表現しているが、この羽田野の解釈は非常に問題を含むものである。ま

ガク派の異名に過ぎないようである。[18] 事実、『カダム明灯史』の章立てには、ダムガク派とシュン派の二派は独立した章（順に、第六章と第七章）として立てられ、詳細に論じられているのに対して、メンガク派に対してはそのような扱いは見られない。[19] 他方、ドムトゥンの三大弟子の残りの一人であるプチュンワは、自身の禅定修行を主として、弟子を取らなかったと伝えられるので、彼の学統は独立した一派として立てられなかった模様である。[20]

このカダム派の二分類、ないし、三分類は、『カダム明灯史』によれば、教説としてのカダムの分類に相応している。即ち、『カダム明灯史』p. 9.19-22：

> 「一般に、勝者の一切の教説でカダムとなっていないものはないが、最近は、カダムの法として良く知られたものには二種類がある。即ち、典籍（gzhung）と教誡（gdams ngag）［の二つ］、あるいは、口訣（man ngag）とで三つに分けられる。

ここに、カダムは、(1) 典籍（gzhung）と (2) 教誡（gdams ngag）の二つ、ないし、それに (3) 口訣（man ngag）を加えた三つに分けられており、このカダムの分類がカダム派の分類の根拠にもなっているのである。即ち、シュン派とは、このうちの〈典籍（gzhung）〉を主として修学するカダム派の一派であり、ダムガク派は、〈教誡（gdams ngag）〉を主として修学する一派を指す。メンガク派もまた同様である。そこで問題となるのは、この典籍（gzhung）と教誡（gdams

---

ず羽田野は、ゴクの系統を、「アティーシャの Man ngag 即ち「秘密の優婆堤舎（道次第はもともと秘法である）を相承する派」」（羽田野1965, p. 280）と規定しているが、アティーシャのウパデーシャ（man ngag, 口訣）を相承する派というのは、カダム派の一分派としてのメンガク派の規定ではなく、むしろ、カダム派それ自体の規定であろう。また、この「シュンルク派」という表現は、筆者の知る限り、チベット人の文献には確認されず、羽田野の造語と思われる。この羽田野の解釈は、山口1982, p. 72にも引き継がれているが、筆者の知る限り、ゴクの学統をメンガク派と規定する文献は確認されない。

18 『トゥンカル大辞典』p. 168参照。実際、例えば、『学者の宴』には、チェンガパの学統（＝ダムガク派）は、「カダム・メンガク派」と明記されている。同書 pp. 718-723、特に、p. 723. 6参照。

19 『カダム明灯史』の章立てについては、羽田野1954, p. 50f., 井内／吉水2011, p. 18参照。

20 『赤冊』p. 61.12f.;『ヤルルン・ジョオ仏教史』p. 99.7参照。

ngag)、ないし、口訣（man ngag）がそれぞれ何を指すのかという点である。これについては『カダム明灯史』では直後に詳しい解説が付されているので、紹介しておこう。[21]

まず、〈典籍（gzhung）〉は、（1）見を主として示すもの（lta ba gtso bor ston pa）、（2）行を主として示すもの（spyod pa gtso bor ston pa）、（3）見と行を双修として示すもの（lta spyod zung 'brel du ston pa）の三つに分けられる。[22]このうち、〈見を主として示すもの〉とは、アティシャにより著作された『入二諦論』（*Satyadvayāvatāra*, Toh 3902, 4467）や『中観口訣』（*Madhyamakopadeśa*, Toh 3929, 4468）等を指し、さらには、ナーガールジュナの『空七十論』や『根本中論』等をも含む。

他方、〈行を主として示すもの〉とは、アティシャの『行集灯明』（*Caryāsaṃgrahapradīpa*, Toh 3960, 4466）や『発心律儀儀軌次第』（*Cittotpādasaṃvaravidhikrama*, Toh 3969, 4490）等を指すが、さらには、『菩薩地』や『大乗荘厳経論』も含まれる。

第三の〈見と行を双修として示すもの〉とは、アティシャの全ての著作の根本（rtsa ba）ないし母体（ma lus）の如き『菩提道灯論』（*Bodhimārgapradīpa*, Toh 3947, 4465）を指すが、さらには、シャーンティデーヴァの『集学論』と『入菩薩行論』、ナーガールジュナの『ラトナーヴァリー』等もまた、〈見と行を双修として示すもの〉とされる。他にも、『菩薩本生鬘論』（*Jātakamālā, sKyes pa'i rabs kyi rgyud*, Toh 4150）や『法集要頌経』（*Udānavarga, Ched du brjod pa'i tshogs*, Toh 4099）もまた、ここに含まれることが明記されている。

以上、『カダム明灯史』に挙げられたシュン派が依用する〈典籍〉を列挙したが、それは、大きくは、アティシャの著作（『入二諦論』、『中観口訣』、『行集灯明』、『発心律儀儀軌次第』、『菩提道灯論』等）と、それ以外のインドの典籍に分けられる。このうちアティシャの著作以外のインドの典籍は、ナーガールジュナの『空七十論』、『根本中論』、『ラトナーヴァリー』のほか、『菩薩本生鬘論』、『法集要頌経』、『菩薩地』、『大乗荘厳経論』、『集学論』、『入菩薩行論』の六つの典籍を含むが、この六典籍は、カダム・シュン派の伝承においては、「カダム六典

21 『カダム明灯史』に見られるものと同様の解説は、『トゥカン教義書』カダム派章にも見られる。『トゥカン教義書』p. 93-105参照。同書のこの箇所に対する和訳としては、井内／吉水2011, pp. 53-65がある。

22 『カダム明灯史』pp. 9.22-10.19参照。

籍（bka' gdams gzhung drug）[23]」と称され、アティシャの著作以外の中では特に重要視されたものである。このように、アティシャの一連の著作の他、特に、カダム六典籍を根本典籍として重視し、その修学を主とするカダム派の一派が〈カダム・シュン派〉と呼ばれるものであり、これは、ドムトゥンの三大弟子の中でも、特に、ポトワに由来し、その筆頭弟子であるシャラワ・ユンテンタク（Sha ra ba yon tan grags, 1070-1141）等に伝承された一派である。[24]

他方、〈カダム・ダムガク派[25]（bKa' gdams gdams ngag pa）〉は、先ほど挙げたカダムの分類のうち、〈教誡（gdams ngag）〉を主として修学するカダム派の一派であるが、この〈教誡〉もまた、〈典籍〉同様に、（1）見が主となっているもの（lta ba gtso bor gyur pa）、（2）行が主となっているもの（spyod pa gtso bor gyur pa）、（3）見と行の双修の道が主となっているもの（lta spyod zung 'brel gyi lam gtso bor gyur pa）の三つに分類される。[26]このうち、〈見が主となっているもの〉とは、アティシャの口訣（man ngag）のうち、チェンガパにより伝承された〈四諦の教導（bden bzhi'i khrid）〉や、プチュンワにより伝承された〈縁起の教導（rten 'brel gyi khrid）〉、大ネルジョルパ（rNal 'byor pa chen po）により伝承された〈二諦の教導（bden gnyis kyi khrid）〉などである。このうち四諦と縁起の教導は、小乗と大乗に共通する人無我に対する教導であるが、二諦の教導は、非常に微細な法無我に対する教導であると云われる。

〈行が主となっているもの〉[27]とは、諸々の大乗の修心の口訣（theg pa chen po'i blo sbyong gi man ngag rnams）である。具体的には、アティシャの師であるダルマラクシタ（Dharmarakṣita）の『武器の輪』（*mTshon cha 'khor lo*, Toh 7007）[28]、『毒を滅する孔雀』（*rMa bya dug 'joms*）[29]、『弥勒の瑜伽の吟修・金剛歌』

23　このカダム六典籍のうち、『菩薩本生鬘論』と『法集要頌経』の二つを、〈信の典籍（dad pa'i gzhung）〉、『菩薩地』と『大乗荘厳経論』の二つを、〈三昧の典籍（ting nge 'dzin gyi gzhung）、『集学論』と『入菩薩行論』の二つを、〈行の典籍（spyod pa'i gzhung）〉と称する。カダム六典籍については、羽田野1954, p. 181参照。

24　カダム・シュン派の相承は、『カダム明灯史』pp. 420-528に詳しい。その相承図をより見やすい系譜の形で示したものに、羽田野1954, p. 176f. があり、有益である。

25　このダムガク派の系譜については、羽田野1954, pp. 179-181参照。

26　『カダム明灯史』p. 10.20ff. 参照。

27　『カダム明灯史』p. 12.3ff.参照。

28　『大乗浄心百選』pp. 81-91に収録。

（*Byams pa'i rnal 'byor gyi gyer sgom rdo rje'i glu*）[30]等や、セルリンパ（gSer gling pa）の『菩薩次第』（*Sems dpa'i rim pa*）[31]、*rTog pa 'bur 'joms*[32]等の口訣を指す。これらは、師から弟子へと秘法（lkog chos）として伝承されたものである。

第三の〈見と行の双修の道が主となっているもの〉[33]とは、「三士の道次第（skyes bu gsum gyi lam gyi rim pa）」として知られているものである[34]。典籍としては、アティシャの『菩提道灯論』が挙げられるが、これは、『現観荘厳論』の口訣に依拠したものである。

以上のように、カダム・ダムガク派は、二諦や縁起等に関するアティシャの口訣や、アティシャから弟子へ秘法として伝承された諸々の大乗の修心の口訣、さらには、三士の道次第を主題とするアティシャの『菩提道灯論』等を主に修学するカダム派の一派であると云えよう。シュン派が一般に公開されている典籍（gzhung）に主に依拠したのに対して、ダムガク派は師から弟子へと秘法として口伝えで伝承された教誡（gdams ngag）ないし口訣（man ngag）を重視した点に、両派の違いを見ることが出来る。纏めるならば、以下の通り。

- シュン派（gzhung pa, 典籍派）：アティシャの一連の著作（『入二諦論』、『中観口訣』、『行集灯明』、『発心律儀儀軌次第』、『菩提道灯論』等）の他、特に、カダム六典籍（bka' gdams gzhung drug）を根本典籍として重視し、その修学を主とするカダム派の一派。ドムトゥンの三大弟子の一人ポトワに由来する。一般に公開されている典籍（gzhung）に主に依拠する点に特徴がある。
- ダムガク派（gdams ngag pa, 教誡派）：二諦や縁起等に関するアティシャの口訣や、アティシャから弟子へ秘法として伝承された諸々の大乗の修心の口訣、さらには、三士の道次第を主題とするアティシャの『菩提道灯論』等を主に修学するカダム派の一派。ドムトゥンの三大弟子の一人

29 『大乗浄心百選』pp. 92-100に収録。
30 『大乗浄心百選』pp. 101-104に収録。
31 『大乗浄心百選』pp. 105-112に収録。
32 『大乗浄心百選』pp. 113に収録。
33 『カダム明灯史』p. 14.21ff.参照。
34 この「三士の道次第」というのは、前述したように、カダムの根本義である。『カダム明灯史』p. 3.3f.参照。

チェンガパに由来する。師から弟子へと秘法として口伝えで伝承された教誡（gdams ngag）ないし口訣（man ngag）に主に依拠する点に特徴がある。

『カダム明灯史』では、カダムの第三の分類として、〈口訣（man ngag）〉をも挙げたが、同書の後続の文章を見るならば、〈典籍〉や〈教誡〉に対して与えられたような解説は全く見出されず、口訣は、教誡とほぼ同一視されていることが分かる。例えば、『カダム明灯史』pp. 19.20-20. 4：

「一般に、教誡（gdams ngag）もまた口訣（man ngag）である。なぜならば、ジョオ（＝アティシャ）が、「ウパデーシャ（upadeśa）は何と訳されるのか」と問うたところ、トゥンパ（＝ドムトゥン）は、「『口訣（man ngag）』と訳されます」と答えたので、［アティシャが］「口訣の意味は何であるのか」と問うたところ、［ドムトゥンは］「秘密を示すこと（gsang ba ston pa）を意味します」と答えた。［アティシャは］「［口訣の意味は、］そうでもあるが、口訣の意味は、［師の教えに対して］害を除き、［師の教えを］愛好することを成就させること云うのである」と仰り、ウパデーシャを文字通りに訳すならば、「近くに示されたもの（nye bar bstan pa）」となるが、それもまた、「速やかに理解させるもの（myur du rtogs par byed pa）」という意味であるからである。」

このように、教誡は、口訣と同義と見做されている。但し、『カダム明灯史』では、その直後に、この「口訣」という語がより限定された意味、即ち、『カダム・レクバム（bKa' gdams glegs bam, カダム書）』の意味で使用される場合を紹介している。[35] この『カダム・レクバム』とは、〈カダム父法（bKa' gdams pha chos）〉と〈カダム子法（bKa' gdams bu chos）〉の二部からなるアティシャの秘伝の口訣集である。このうち、カダム父法とは、アティシャがドムトゥンに伝えた口訣集であるのに対して、カダム子法とは、アティシャがゴク・レクペーシェーラプとクトゥン・ツゥンドゥユンドゥンの二者に伝えた口訣集である。この『カダム・レクバム』の根本句（rtsa tshig）は、アティシャの『百小部集』（*Chos chung brgya rtsa*）に収録された『菩薩宝環』（*Byang chub sems dpa'i nor bu'i phreng ba*, Toh 4471）であるが、これに関して、アティシャが「父」、即ち、ドムトゥンに

35 『カダム明灯史』p. 20.4ff.参照。

下した口訣集を「父法」と云い、「子」、即ち、ゴク・レクペーシェーラプとクトゥン・ツゥンドゥユンドゥンに下した口訣集を「子法」と云う。この口訣は何れもアティシャが下した点では相違なく、その口訣の伝授先に違いがあることから、父法と子法という区別が立てられたという。[36]

以上、シュン派とダムガク派というカダム派の二分派の内実を概観した。そこで、次に、カダム派とサンプ系学者との関係を考察する必要があるのだが、まず最初に指摘すべきは、サンプ系学者は、カダム派の両派、即ち、シュン派とダムガク派の何れの系譜にも入っていないことである。つまり、サンプ系学者達は、シュン派とダムガク派の相承の外部に位置している。実際、『カダム明灯史』においては、サンプ系学者は、ダムガク派の相承を主題とした第六章とシュン派の相承を主題とした第七章ではなく、第四章「ジョオ自身の直弟子が如何に起こったのかという仕方を述べる章」(ibid., pp. 130-211) に見出される。[37] しかも、それは、アティシャの直弟子であるゴク・レクペーシェーラプの事績から派生した二次的な主題としてごく簡略に触れられるだけであり、しかも、前述したように、ゴク翻訳官の四大弟子とチャパ以降のサンプ系学者に対しては言及自体が見られない。[38]

3. カダム教学とサンプ教学の関係：

また教学面から考えてみても、道次第を主としたアティシャの教誡に起源するカダム派の教学は、インドから弥勒の五法、論理学、自立派系の中観などの新しい相承を導入したゴク翻訳官に起源するサンプ系の教学とは明らかに別個のものである。ゴク翻訳官やその直弟子のトルンパに道次第の著作があり、そ

36 以上の『カダム・レクバム』についての解説は、『カダム明灯史』p. 24.22ff. によった。『カダム・レクバム』については、既に羽田野伯猷の解説がある。羽田野1965, pp. 280-283参照。

37 『カダム明灯史』pp. 147-155参照。

38 同様の状況は、『トゥカン教義書』のカダム派章にも確認される。同書においても、サンプ系の学者に対する言及は、ゴク叔父甥の二人のほかは、ゴク翻訳官の直弟子達に留まっており、せいぜい、トルンパに『教次第大論』という道次第の著作があり、これがツォンカパに影響を与えたと述べられている程度である。チャパやその弟子筋に対する言及は皆無である。『トゥカン教義書』p. 92参照（和訳は、井内／吉水2011, p. 51)。

れは確かにアティシャの口訣に由来するものであるが、但し、サンプ教学全体を鑑みる場合、それはむしろ例外的であり、道次第は決してサンプ教学の主要な主題ではなかった。例えば、サンプ教学の大成者であるチャパ・チューキセンゲには、道次第の著作は知られていない。サンプ系学者に道次第の著作があったとしても、それは、サンプ寺内部の相承に基づくものではなく、サンプ寺外部のカダム派の諸寺院に伝承されてきた相承によるものであり、道次第は、決してサンプ寺内部において伝統的に伝承された主題ではなかった。サンプ教学の主要主題は、ゴク翻訳官がインドから導入した、弥勒の五法、論理学、中観（自立派系）の三分野、さらには、それに菩薩行論を加えた四分野である。[39] カダム派の教学とサンプ系教学の特徴を纏めるならば、以下の通りである。

- カダム教学：ヴィクラマシーラ寺で研鑽を積んだアティシャの教誡に起源し、ドムトゥン及びその弟子筋の者達により伝承された、道次第（＝カダム）を主要主題とする教学。所依典籍としては、『菩提道灯論』等のアティシャの一連の著作の著作のほか、シュン派では〈カダム六典籍〉、ダムガク派ではアティシャの秘伝集成である『カダム・レクバム』を主に使用する。
- サンプ教学：ゴク翻訳官がインドやネパールから伝えた相承に起源し、彼の四大弟子を中心とする直弟子達により伝承された、弥勒の五法、論理学、中観（自立派系）、菩薩行論等を主要主題とする教学。ゴク翻訳官が住持したサンプ寺及びその系統の諸寺院に伝承されたので、サンプ教学と云われる。

このように、カダム派の教学とサンプ系の教学は、その起源も、その内容も、その伝承の担い手も基本的に別個のものであると結論できる。

総括―サンプ寺はカダム派に帰属するのか否か―：

以上、確かに教学面からは、カダム派の教学とサンプ系教学は全く別系統であることが確認された。但し、このことは、厳密に考察する場合、サンプ系学者がカダム派という一宗派に属していないということを即座に意味するわけで

39　サンプ教学の主要主題については、西沢2011, Vol. 1. p. 123-125； 2012, p. 3参照。

はない。或る学僧が或る宗派に帰属しているか否かということは、教義面よりも、むしろ、経済面に依拠しているからである。例えば、「リメー(ris med)」という概念は、そのことを如実に示している。この語は、「無宗派」と訳されることがあるが、この概念は、「トゥプター・リメー(grub mtha' ris med)」とも表現されることがあるように、教義(grub mtha')が特定の宗派に限定されないものという意味であり、必ずしも、或る特定の宗派に帰属していないことを意味しているわけではない。[40] 例えば、ジュ・ミパム・ジャムヤンナムギェルギャンツォ('Ju mi pham 'jam dbyangs rnam rgyal rgya mtsho, 1846-1912)やコントゥル・ユンテンギャンツォ(Kong sprul yon tan rgya mtsho, 1813-1894)は、リメーと称されるが、これは、顕教教学研究において、彼等が宗派の別を問わずに多くの学者に師事して研鑽を積み、超宗派的な立場から著作を行ったからであり、彼等が特定の宗派に所属していないことを意味するわけではない。実際、ジュ・ミパムはニンマ派に所属し、コントゥルはカギュ派の僧侶である。僧侶といえども、衣食住を提供してくれる日常生活の場としての僧団に所属する必要があるのであり、宗派というものは、宗教的実践の場であると同時に、生活の場でもあることを忘れてはならない。これと同様に、サンプ系学者達もまた、教義上は、カダム派から一線を画するが、宗派としてはカダム派へ所属していたことは可能性としては不可能ではない。その際にネックとなるのは、サンプ寺が経済的にカダム派へ依存していたか否かという点である。もしサンプ寺の経済的基盤がカダム派にあるのであれば、サンプ寺はカダム派所属の寺院である。他方、もし、サンプ寺がカダム派から経済的に完全に独立しているのであれば、カダム派に帰属するとは見做し得ない。

但し、残念ながら、我々はこの点に光を当ててくれる資料を欠いているのが現状である。寺統史や仏教史は、師資相承の系譜や高僧の伝記等を主要主題とするのであり、寺院の経済的基盤に関しては殆ど情報を与えてくれないのが常である。ましてや、カダム派は既に消滅して久しく、サンプ寺も建物の管理人が数人住んでいるだけで、実質的には空き寺に等しい現状と伝え聞いている。そのような資料的現状では、この問題に対して決定的な回答を与えることは殆

40 その意味で、「リメー(ris med)」という語は、その教学—特に顕教教学—が特定の宗派の枠組みを越えているという意味で、「超党派」、あるいは、「超宗派」と訳されるべき語である。

ど不可能である。しかし、先に指摘したように、サンプ系学者は、カダム派のいずれの分派にも帰属しておらず、実際、『カダム明灯史』の如き信頼性の高い史書においても、サンプ系学者に対する言及が極めて限定されたものであり、特にチャパ以降のサンプ系学者に対しては言及自体が皆無であること、さらには、教学面の点でも、サンプ寺がカダム派とは別系統の学統を伝承していること等の諸状況を鑑みるに、サンプ寺はカダム派と密接な関係はあるにせよ、本来的な意味でのカダム派の寺院とは見做し難いこと、またそれ故にこそ、サンプ寺の学僧達はカダム派所属とは見做し難いこと、サンプ寺は、例えば、シャル寺のように、一寺院だけで独立した一派を形成していたこと等が推測されるのである。

サンプ寺には、多くの宗派の学僧達が集まったが、何時しか、サキャ派とゲルク派の講学院／学堂（bshad grwa/ grwa tshang）がサンプ寺内部に多数創設されるようになった。その後、それらの講学院がサンプ寺外部へ移転したことを通じて、サンプ寺は空洞化して、急激に衰微した。その経緯については既に別稿において論じたので、ここでは再説しない。[41] 現在は、本堂に建物の管理人―サキャ派の僧侶らしい―が数人住するだけで、大部分の僧坊は放棄され、草蒸した土台のみが点々と敷地跡に残され、僅かに残された建物には俗人が住する寒村となっている模様である。[42]

原典資料：

dKa' gdam ngo mtshar rgya mtsho（『カダム妙海史』）

［A mes zhabs］Ngag dbang kun dga' bsod nams, *dGe ba'i bshes gnyen bka' gdams pa rnams kyi dam pa'i chos byung ba'i tshul legs par bshad pa ngo mtshar rgya mtsho zhes bya ba bzhugs so*. mTsho sngon mi rigs dpe skrun

41　西沢2011, Vol. 1, pp. 300-315； 2012, pp. 6-9参照。

42　筆者は、2012年九月初頭に神戸で開催された第三回若手チベット学者国際会議（ISYT）に参加したが、その際、中央民族大学蔵学研究院の Shar gzhon tshe ring zla ba 先生から、サンプ寺の現状についてお話を伺い、同先生が撮られた同寺の写真を拝見する機会を得た。この記述は同先生の情報提供に依拠している。さらには、大谷大学の三宅伸一郎先生からも、同先生が撮影された写真をいただいた。両先生には記して感謝の意を表する次第である。

khang, 1995.

dKa' gdams rin po che'i chos 'byung（『カダム珍宝史』）

bSod nams lha'i dbang po, bKa' *gdams rin po che'i chos 'byung rnam thar nyin mor byed pa'i 'od stong*. In: *Two Histories of the bKa'-gdams-pa Tradition from the Library of Burmiok Athing*. Gangtok, Sikkim, 1977, pp. 207–393.

dKa' gdams gsal sgron（『カダム明灯史』）

Las chen kun dga' rgyal mtshan, *bKa' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2000.

bKa' gdams gsung 'bum（『カダム全集』）

bKa' gdams gsung 'bum phyogs bsgrigs bzhugs so. Ed. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang, Vol. 1–30, Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2006；Vol. 31–60, Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2007； Vol. 61–90, Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2009.

mKhas pa'i dga' ston（『学者の宴』）

dPal dpa' bo gtsug lag phreng ba, *Chos 'byung mkhas pa'i dga' ston*. 2 vols., Varanasi: Vajra Vidya Library, 2003.

rGya bod yig tshang（『漢蔵文書集成』）

sTag tshang rdzon pa dPal 'byor rgyal mtsho, *rGya bod kyi yig tshang mkhas pa dga' byed chen mo 'dzam gling gsal ba'i me long zhes bya ba bzhugs so*. In: *Sa skya'i chos 'byung gces bsdus*. Ed. Sa skya'i dpe rnying bsdu sgrig u lhan, Vol. 3, Krong go'i bod rig dpe skrun khang, 2009.

Thu'u bkwan grub mtha'（『トゥカン教義書』）

Thu'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma, *Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long zhes bya ba*: Thu'u bkwan grub mtha'. Kan su'u mi rigs dpe skrun khang, 1984.

Theg pa chen po blo sbyong brgya rtsa（『大乗浄心百選』）

Byang sems gzhon nu rgyal mchog dang/ Sems dpa' chen po Mus chen dkon mchog rgyal mtshan gyis phyogs bsgrigs mdzad pa'i Theg pa chen po blo sbyong brgya rtsa bzhugs so. New Delhi: Institue of Tibetan Classics, 2004.

Deb sngon（『青冊』）

'Gos lo tsā ba gZhon nu dpal, *Deb ther sngon po*. 2 vols., Varanasi: Vajra Vidya Library, 2003.

Deb dmar（『赤冊』）

Tshal pa kun dga' rdo rje, *Deb ther dmar po*. Edited and Noted by Dung dkar blo bzang 'phrin las, 2nd. ed., Mi rigs dpe skrung khang, 1993.

Bu ston chos ’byung（『プトゥン仏教史』）
Bu ston rin chen grub, *Bu ston chos ’byung*. Ed. rDo rje rgyal po, Krong go’i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1988.
Yar lung jo bo’i chos ’byung（『ヤルルン・ジョオ仏教史』）
Yar lung jo bo Shākya rin chen sde, *Yar lung jo bo’i chos ’byung*. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 1988.
gSang phu gsal ba’i me long（『サンプ明鏡史』）
Rin chen ’byor ldan（supplemented by Byams pa kun dga’ ’byung gnas), *dPal ldan gSang phu’i gdan rab gsal ba’i me long*. Otani Catalogue No. 13981.（abu med Ms., 13 fols.）

辞典類：

『トゥンカル大辞典』 *Dung dkar tshig mdzod chen mo*. Ed. Dung dkar blo bzang ’phrin las. Krung go’i bod rig pa dpe skrun khang, 2002.
『蔵漢大辞典』 *Bod rgya tshig mdzod chen mo*. 2 vols., Mi rigs dpe skrun khang, 1993.

参考文献：

井内真帆／吉水千鶴子
2011 『西蔵仏教宗義研究、第九巻―トゥカン『一切宗義』「カダム派の章」―』Studia Tibetica 44, 東洋文庫。
羽田野伯猷
1954 「カーダム派史　資料篇」『チベット・インド学集成　第一巻チベット篇 I.』法蔵館, 1986, pp. 46-191.（初出：『東北大学文学部研究年報』 5）
1955 「カーダム派（Bkaḥ-gdams-pa）について―Vinayadhara との交渉―」『チベット・インド学集成　第一巻チベット篇 I.』法蔵館, 1986, pp. 205-215.（初出：『印度学仏教学研究』3-2）
1965 「チベットにおける仏教観の形成について―菩提道灯・サンプ仏教学・カーダム宝册等をめぐって」『チベット・インド学集成第一巻チベット篇 I.』法蔵館, 1986, pp. 277-303.（初出：『文化』29-2）
西沢史仁
2011 『仏教論理学の形成と展開―認識手段論の歴史的変遷を中心として―』全四巻、東京大学。［＝博士学位論文］
2012 「サンプ教学の歴史的展開に関する一考察」『日本西蔵学会々報』58, pp.

1-14.

山口瑞鳳

1982 「カダム派の典籍と教義」『東洋学術研究　特輯　チベット仏教』21-2, pp. 68-80.

Everding, Karl-Heinz

2009 "gSang phu Ne'u thog, Tibet's Earliest Monastic School (1073). Reflections on the Rise of its Grva tshang bcu gsum dang Bla khag bcu." *Zentralasiatische Studien des Seminars für Sprach- und Kulturwissenschaft Zentralasiens der Universitat Bonn* 38, pp. 137-154.

Van der Kuijp, Leonard W. J.

1987 "The Monastery of Gsang-phu ne'u-thog and Its Abbatial Succession from ca. 1073-1250." *Berliner Indologische Studien* 3, pp. 103-127.